

# 横光利一『上海』に描かれた外国人をめぐる一考察 ―井東憲を視座に―

渋谷 香 織\*

## The Representation of Foreigners in "Shanghai"

Kaori SHIBUYA\*

### 一

一九二〇年代から三〇年代にかけての上海は世界に類例を見ないアジアの中の国際都市であり、日本人にとってパスポートなしでいける唯一の外国の大都会であった。『上海年鑑 一九二六年版』<sup>〔1〕</sup>には「上海はユニークなる一開港場である。上海は支那の領土にして支那の主権の及ばざる一大コスモポリタタウンであ」り、「その居留民には世界各国の国民を包含し、其政治機関は全然支那人の手を触れ得ざる市参事会の手を以つてせられ、支那人に関する司法権の行使さへ支那人の思ふまゝに裁断し得ない。かくの如き都市は世界の何れの土地にも存在しない。」と記述されている。当時、上海の共同租界には「最近

五年間に約四割の激増をなした」という日本人をはじめ、イギリス人、アメリカ人、フランス人、白系ロシア人、アジア系インド人、ベトナム人などおよそ六万人が居留していたという。

上海のガイドブックや紀行文が出版され、版を重ねるものも出ていたこの時期、上海に影響を受けた日本文学者も少なくなかった。そのひとり村松梢風も、『魔都』（一九二四年、小西書店）や『上海』（一九二七年、騒人社）を発表し、一九二〇年代の上海に関するイメージを日本人に植えつけることになった人物であった。

一九二七年七月、上海に渡り、四ヶ月間滞在した井東憲は村松の『上海』に影響を受け、短篇「白蘭花の殺人」をはじめとする上海を舞台

にした作品を次々に発表し、『上海夜話』（一九二九年、平凡社）にまとめ、さらに『赤い魔窟と血の旗』『新上海夜話』を刊行した。また、横光利一は一九二八年旧友を頼り上海に出かけ、一月ほどそこで過ごし、帰国後、雑誌『改造』に「風呂と銀行」「足と正義」等の題名で断続的に上海を舞台にした小説の連載を開始、一九三二年『上海』という単行本にまとめている。

あいついで上海に短期間滞在した井東憲と横光利一という二人の作家の上海を舞台にした作品から、一九二〇年代の上海という国際都市における社会、文化、政治、経済に関する様々な表象を読み取ることができるが、本稿においては井東憲の『上海夜話』、横光利一の『上海』という二作品に描かれた上海における外国人表象について、ロシア人女性の表象に注目して考察してみたい。一九二〇年代の上海とは、中国の文化と欧米やロシアの文化が交差する場であり、ほぼ同時期に上海を描いたこの二人の作家ともロシア人の女性を主要な登場人物として描いているからである。二人の作家のロシア人女性表象を比較検討し、国際都市上海の外国人表象について考えることで、当時の日本人の上海に対する意識や国際感覚を探ってみることにする。

## 二

横光利一が旧友今鷹瓊太郎の住む上海を訪ねて上海に出かけたのは、前述したように井東憲が上海に滞在した翌年四月のことである。

横光利一はこの上海を舞台にした小説を一九二八年十一月から一九三一年十一月まで雑誌『改造』に「風呂と銀行」「足と正義」「掃溜

の疑問」「持病と弾丸」「海港章」「婦人―海港章―」「春婦―海港章―」というタイトルで発表し、『文學クオタリイ』に発表した「午前」を加え改稿したものを、昭和七年に改造社から『上海』として刊行した。

『上海』という小説は、一九二五年に起こった五三〇事件を背景に、一九二〇年代の国際状況、経済事情など複雑な様相や革命の中での人間模様を描いた作品である。「支那の主権の及ばざる一大コスモポリタントウン」を舞台にしたこの作品には、日本を離れた参木という主人公と、シンガポールからやってきた友人甲谷、アジア主義者山口、お杉という湯女、踊り子宮子といった日本人をはじめ、中国人資本家銭石山、中国人の革命の闘士芳秋蘭、国を追われて上海に流れ着いたロシア人女性オルガなど国際都市上海を表象する各国人の様相が描かれている。各国人の中でも、国を追われ上海に流れ着いてきたロシア人に対する思いは銀行を解雇された主人公参木の国家に対する思いと重なり、最初に発表された「風呂と銀行」では以下のように語られている。

ここでは本国から生活を奪はれた各国人の集団が集合しつつ、世界で類例のない独立国を造つてゐた。だが、それぞれの人種は、各自の本国が支那の富源を吸ひ合うための吸盤となつて生活してゐる。此のためここでは、一人の肉体は、いかに無為無職のものと雖も、ただ漫然としてゐることさへ、その肉体が空間を占めてゐる以上、ロシア人を除いては、愛国心の現れとなつて活動してゐるのと同様であつた。…中略筆者…参木は自分たちの周囲に

流れて来てゐる旧ロシアの貴族のことを考へた。彼らの女は、各国人の男性の股をくぐつて生活してゐる。さうして男は、各国人の最下層の乞食となつて。(「風呂と銀行」)

ここで、「本国から生活を奪はれた各国人の集団」のなかで特にロシア人について言及しているように、この小説のロシアあるいはロシア人に関する記述は小説中数十箇所に及んでいる。

この「風呂と銀行」の冒頭部分は、「浪打際のベンチ」の「ロシア人の疲れた春婦」に声をかけられた参木が女と並んですわり、彼女たちと会話をする場面である。「お金もないし、お国もないわ」というロシア人娼婦の言葉から横光のこの小説におけるロシアやロシア人表象は始まっているのである。ロシア人に関する表象はこの小説では春婦との一時の出会いや、一般的なロシア観にとどまらない。一人の名を与えられたロシア人女性を描かれるようになるのである。

まず、このロシア人女性に関する記述について確認していきたい。

「風呂と銀行」で最初にこの女性が、山口に買われた女性として登場するときはまだ名前も与えられていない。山口が参木に紹介したい「ロシア人」の女性がいると甲谷に話をするだけである。<sup>②</sup>

それが、一九二九年三月に発表された「足と正義」では「オルガ」と呼ばれるようになる。それは、参木が「山口の幾人かの女の中、此のオルガの淋しさを慰める命令を受け」音楽が帝政時代みたいに好きなおルガと「三日間、殆どロシアの知事の生活と、チエホフとチャイコフスキーとボルシェビークと日本と、カスピ海の腸話の話とで暮ら

してきた」ことが語られる場面である。二人の会話の概要が語られたあとで、オルガは「オデッサへ帰りたい」「ボルシェビーク、悪魔、あなたたちは私をこんなにしたんです」という言葉を口にする。ここで、オルガは一人のロシア人女性としてチエホフ、チャイコフスキーとボルシェビーク、カスピ海の腸話という、ごく一般的なロシアやロシア人について参木に語っている。このオルガとの会話には、一般的なロシアやロシア人イメージしか表象されておらず、オルガの口を通して語られる革命後のロシア批判や過去の帝政ロシアへの思いもごく簡単なものにすぎない。それはこの場面の中心がロシア表象にあるのではなく、オルガと参木の男女関係にあるからだと考えられる。この小説における参木は様々な境遇の女性たちから思いを寄せられている存在として描かれており、この場面でもオルガに「わたしを忘れちゃいやよ」などと言わせている。すなわち、オルガは一人のロシア人女性と描かれているものの、最初に山口が甲谷に「参木の奴にひつつけてやらう」と思っていた女性という役割にとどまっている。この場面では、確かに固有のロシア人女性として表象されているが、「足と正義」の段階では、参木を取り巻く女性という位置しかオルガには付与されていないと言える。

ところが、次にこのオルガというロシア人女性が登場する一九三一年正月号の『改造』の「婦人―海港章―」では、この女性の描かれ方が変化しているのである。

革命下の上海で山口の家に逃げ込んだ甲谷がオルガに紹介され、会話をする場面であるが、革命が起こっている上海の様子を「何事が起

るかさつぱり見当がつかん」という甲谷がオルガの革命体験を訊ねるという件になっている。そこで、ロシアが昔のように帝政ロシアに戻ること待つつオルガが上海に流れ着くようになった経緯が知らされる。それは、一九一七年、ロシア革命が起こり、帝政ロシアの貴族は海外に亡命し、家族とともにシベリア経由で中国東北部ハルビンに行き、父親を亡くし、いつの間か上海までやって来たというオルガの語りである。上海にたどり着くようになった経緯が、オルガの口を通して革命批判とともに詳細に説明されていることから、ロシア人女性オルガの役割に変化が起きたと考えられるのではないだろうか。

李征は、この場面を踏まえ、『上海』において、オルガをはじめとする白系ロシア人の造型は、外国人表象としてとくに注目値する。白系ロシア人が上海に流入してきた経緯に関して、小説では、オルガの口をとおして述べられている。<sup>3</sup>と、オルガの語りの重要性を指摘している。ここではもはや参木を取り巻くロシア人女性というより、国際都市上海にやってくるようになったひとりのロシア人女性として描かれているのである。

また、このように、オルガの語りから、亡命ロシア人貴族が上海に流れ着くようになった経緯を明らかにすることによって、それまで、上海という場を構成するにすぎなかった一人のロシア人女性に固有性が付与されることになる。ここに小説自体の変容がみられるといつてよいだろう。

李征はまた、オルガ来歴の記述を『貢太郎見聞録』などに見られる上海における白系ロシア人に関する記述のようなものを参照して再

構成されたものである<sup>4</sup>と、この場面には典拠の存在があることを示唆している。『改造』に発表した作品を長編小説『上海』に仕上げるために様々な書物を利用したことについて、横光は後年、『上海の事』<sup>5</sup>で次のように述べている。

上海について正確な判断を下すことは、恐らく何人も不可能なことだと思ふ。私は上海といふ作を、四年がかりで書いたことがある。その間、私はかの地で買って来た上海に関する書物や雑誌と日本で発行されたものと、四、五百冊ほど手に入れた。それら著者の立場を同じくするものを選ばず、異なったもののみ選んでみたので、立場にしたがつてかくも見方が相違するものなのかといふ感想と同時に、上海といふ所は、人々の見方を、こんなに複雑にする特殊な場所だといふ結論を得た。

李征の論と、引用した横光の言から、横光が『上海』という小説の創作に当たって試みたことは、さまざまな書物、雑誌等からえた「事実」の再構成化、コラーージュ化だったのではないかと推測される。横光の小説執筆当初の意図が上海という場を映し出す小説を描くことではなかったことは改造社社長山本実彦宛（昭和三年六月十五日消印）の以下の手紙から明らかである。

今日水島君が来られました上海紀行を書けとのことでしたが、紀行に書いてしまえますと材料が盛り上がつて来ませんし、たい

ていの人がそれで失敗してつづいています。それで私は上海のいろ  
いろのおもしろさを上海とどこともせず、ぼつかり東洋の塵  
埃溜にしてつづて一つさう云ふ不思議な都会を書いてみたいので  
す。それには紀行でも、短篇でも書いてつづたら、もう駄目です  
から、ぢくぢくかかつて長篇にしたいと思つてゐるのです。

一九二七年当時、村松梢風の『上海』をはじめとする上海関連作品  
が発表されてブームになっている中、「上海」という名をつけ売り出  
したいという出版社と横光利一の「上海」との意思に行き違いがみられ  
たのであろう。両者の闘ぎ合いもあっただろうが、単行本として出版  
される時に「上海」というタイトルは実現することになった。「不思議  
な都会」を「上海」らしい小説にして行こうとするために、「四、五百冊」  
ほどの資料を利用し、当時の上海らしさを加えていこうという意図が  
あったのではないだろうか。しかし、横光が描く一九二〇年代の上海  
は、実は様々なメディアの中から作家の意図によって選びとられた言  
説に基づいて表象されたものにすぎない。そこに、横光の改稿の意図  
も見えてくるのではないか。それは数多くの文献を参照しながら、「上  
海」という都市を舞台にした小説を描く方向に変更しようという姿に  
他ならない。とすれば、横光利一にとって、「四、五百冊」ほどの書物  
は「上海」を描き出す重要な典拠であつたのだ。それは五三〇事件や  
インド人ジャイランダスについての記述に関する典拠とするものの存  
在が明らかになっていることから想像に難くない。<sup>(6)</sup>

### 三

プロレタリア作家として『種蒔く人』や『文藝戦線』に作品を発表  
していた井東憲は一九二七年、「白蘭花の殺人」恋の密輸入者「奇縁の  
マリさん」角を曲がった辻馬車」をはじめとする上海を舞台にした作  
品を次々に発表し、『上海夜話』（一九二九年、平凡社）にまとめた。

その中の一つにロシア人娼婦が登場する「奇縁のマリさん」という  
作品がある。

それは主人公の「私」が偶然二度であつたロシア人女性に興味を持  
ち、友人周君とその住まいを訪ね、話を聞くが、その後その女性と会  
えなくなつてしまい、やがて新聞記事から彼女が麻薬密輸の嫌疑をか  
けられていることを知るといふ内容の作品である。

七月の末、主人公の「私」が「ローマンカツオリツク教会」に出か  
け、信者では決まてないという風変わりな「若い紅毛の婦人」と出会  
い、秋になり上海の「新友」周莊清と新公園に遊びに出かけ、この婦  
人と再会し、一緒にテニスを楽しむ。彼女のすさんだ顔や瞳の中に「北  
四川路の裏通りあたりに巢を食ふ女」だと想像するものの、周君が彼  
女の住まいにこだわりはじめ、やがてイギリス人の乞食親父の口か  
ら住所を知り、アルコール中毒の乞食がマリさんと呼ぶ「神秘的な学  
者」マリさんを訪ね、北四川路のロシアの淫売窟の裏手の彼女の家に  
向かい、彼女の話の聴くという部分から、マリさんの語るロシア観に  
ついて考察してみたい。

いつ故国を出たかという周君の質問にマリさんは「七年前……十八  
の年です。レニントロツキーが奮闘してゐましたわ。私は、トロツキ

ーのものを愛読しました。労働者の詩もよく読みましたわ。ね、ミスタ、牛トン、ミスタ、チオウ、妾、今日自分の考えてゐること、みんな語つてみたいわ。聞いて下さる。」とロシアの革命家たちの実名を上げ、その主義に賛同していることを示した上で、彼女のロシア観を語り始めるのである。それは、以下の通りである。

妾は、何といつても矢張り故国を愛しますわ。そして、故国の新しい政治もそのまゝに信じますわ。妾、ロシアは偉大な国だと信じているんですもの……。こんな言い方は変？

妾は、これでも運命的に音楽家なんです。子供の頃からずっとステヂに立つてゐました。アルツバーセフ流に云ふと、愚劣な神秘が妾の運命の火に水をかけるまではね。つまり、この愚劣な神秘のお陰で肉の小間切れとなり下るまではね。妾はいろいろな本を読んで、その愚劣な神秘といふものの本体を知ったんですが、そのブルジョアの手品の源が分かった頃には、この窟の中で身動きが出来なくなつて了つてゐたんです。妾が身動きが出来なくなつて了つたといふ意味は、大体御察しでせうが、何も妾一人が抜け出せないといふ意味ぢやなくつて、妾は第二の妾を作り出したいくもないし、第一妾だけがこゝを出て了ふのが皆なに申訳けなくなつて了つたといふ意味なんです。

自分の生活のことを考えると、ドストイエフスキーのやうに暗

く淋しくなつて了ふのです。

ロシアならば、たとへ一介の夜の娘の作つたものだつて、きつと理解して認めてくれますわ。

今のロシアはすっかり科学者になつて了つてゐますが、でもロシアは芸術家の魂を持つてゐますから、音楽のこともよく分つてくれます。

この引用に見られるように、マリさんは盲目的に故国を愛し、「新しい政治」を信じ、ロシアを偉大な国であると信じ、「ブルジョアの手品の源が分かった頃には、この窟の中で身動きが出来なくなつて了つてゐた」と、上海に流れてきて娼婦に身を落としてしまつても、帝政ロシアを否定し新しいロシアを擁護する言葉を続けていく。また、「音楽家」と称するマリさんは、ロシアは芸術が分かる国であるという視線も持っている女性として描かれている。井東憲というプロレタリア文学者の描くロシア人女性像としては当然ではあるが、彼女の言葉は「新しい政治」体制のロシア擁護という線で貫かれているのである。

ここに、自分の思想的立場をマリさんの語らせるといふ井東のプロレタリア作家特有の態度を見ることが出来る。マリさんの語るロシア観はプロレタリア作家として出発し、『種蒔く人』『文藝戦線』等で活躍していた井東のロシア観に他ならない。上海でのロシア人はこうあるべきだといういわばプロレタリア作家独特の紋切り型のロシア観がそこにはつきりと描かれている。

次に、マリさんと会えなくなった「私」が「ロシア籍の女アヘン密輸入の嫌疑に工部局警察署に留置される」という新聞記事を目にし、通称マリ事ロシヤ生れワレンチナ・カルミナ二十四歳」がアヘン密輸入事件に関係ありと推定され、取調べを受けていることを知った場面について考えてみたい。それは次のように述懐される。

彼女が淫売婦であるがために、身に憶えのない災難を受けたことを想像し直覚した。

彼女に会って人生の話をしたのはたつた一度だ。決して人生に對する純真さを失っていなかった。

上海といふところは、各国の種々様々な暗い影をもつた人々が集まつてゐるのであるがそれらの人々は巧みに逃げ廻つて容易につかまらない。罪人にされて了ふのだ。かういふ人為的な不幸を見るのは、淫売婦とか、浮浪人とかが一番多い。

娼婦に身を落としているが、革命を肯定して生きていく女性、しかし、「暗い影を持」つ上海で彼女は不幸にもアヘン密輸容疑の犯罪者に仕立てられ警察に捕まってしまうという、結論付けるのである。「奇縁のマリさん」は職業によって差別されるという上海社会の側面を描いているが、「私」がマリさんとロシア人であるとか、あるいは娼婦であるという立場を超え、一人の人間として向き合う姿が描かれている作品でもある。ロシア革命への賛同を示した作品であると同時に、上海での底流を生きていく人々への温かな眼差しがその中心に据えられ

ている作品であるといえるのではないか。

#### 四

横光利一、井東憲の描くロシア人女性を考察してみると、二人のロシア人女性表象はかなり類似した表象であると同時に、異質な表象との印象も受ける。井東が「マリさん」に來歴を語らせたように、横光もオルガに革命やその來歴について語らせている。このように横光が、ロシア人女性の口からその來歴を語らせるといふことはどういうことなのだろうか。実は、オルガの口からロシア革命や來歴について語られるのは『上海夜話』が出版された後のことである。横光が「四、五百冊ほど」手に入れた上海関係の書物や雑誌の中に井東憲の『上海夜話』がないとは言えないだろう。井東の『上海夜話』が出版された後に執筆された部分でのロシア人女性の描き方の変化、これは単なる偶然とは言い難い。それは「四、五百冊ほど手に入れた。それも著者の立場を同じくするものを選ばず、異なつたもののみ選んでみたので、立場にしたがつてかくも見方が相違するものなのかといふ感想と同時に、上海といふ所は、人々の見方を、こんなに複雑にする特殊な場所だといふ結論を得た」という「上海のこと」の言葉からも推察される。数多の書物と井東の方法を利用して、横光の『上海』が変化していったといつても過言ではない。

上海への渡航者がふえ、在留日本人の数が増えるにつれ、日本人の文学者たちが上海を訪れることも多くなり、上海関係の出版物も多くなる一九二〇年代の上海を描いた二編の作品のロシア人女性表象から、

多国籍の人々が大勢生活している上海の国際都市の新たな外国人像が浮かび上がってくる。

さらに、井東憲の『上海夜話』に描かれた交友関係から、井東独特の国際感覚を見て取ることができる。『上海夜話』冒頭の作品「白蘭花の殺人」では、「私」は『いかにも上海にごろついてゐるらしい、頗る風変わりな毛唐』イタリーのおやぢを紹介され親しくなり、白蘭花好きなロシアとアメリカの混血青年を知ることになったり、「角を曲がった辻馬車」の「私」は上海についてすぐイギリス人男性と知り合い、ダンスホールに連れて行ってもらうようになったりするなど、主人公が日本人と付き合うように、ごく自然に外国人と親しく付き合っている様子が描きだされている。外国人との交流が日本人との交流と同じように違和感なく描かれているのである。

『上海夜話』について、大橋毅彦<sup>7)</sup>は井東憲が「上海の街をヴァガボンド（放浪者）風にぶらつくのが好きだったらしい」とし、『上海夜話』の文中では「私」の漫歩が深夜に始まるものが多く、彼の好みは深夜の漫歩にあったことを指摘する。そして真夜中の漫歩、楊樹浦方面にこだわるのは「そこでは外国資本によって築かれた、華やかで繁栄した都市上海のイメージに包摂できない世界を持つ、ある種不気味な魅力が語られていると判断されるからだ」というが、井東は「ヴァガボンド（放浪者）」として上海の街を自由に放浪することで、『上海夜話』におけるさまざまな外国人表象を作り上げることが出来たのではないだろうか。

井東のこだわった「深夜」の漫歩は上海の各国の下層階級の人々と

対峙し、自身のプロレタリア文学者たる立場を確認する場だったにほかならない。

「ここでは各国人が租界といふ不思議な場所で各自の本国の首都と競い合ひをする。私に上海を見て来いと云つた人は芥川龍之介氏である。氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかねばいけないと云はれたので、その翌年上海に渡ってみた。」<sup>8)</sup>と、芥川に勧められたこともあって上海に出かけた横光であるが、友人の今鷹氏を頼つての上海行きであった。上海での行動は日本の文壇とはかわりを持たないものだったという。それは、主人公参木の女性たちと関わりを持つとうとしない姿や、外国人ともあまり関わらずに、自分の周りの人々としか関わらないような小説の中の参木の姿につながってくるのではないか。また、上海を舞台にしたこの小説の中には当時の状況そのままにさまざまな立場の外国人が出てくる。そこには、上海という場にいる外国人の様子をそのままに描いたというより、国際都市上海という場を描くために外国人を配置するという考えがあるのではないだろうか。横光は一九三二年の改造社版『上海』の序で次のように述べている。

この作を書かうとした動機は優れた芸術作品を書きたいと思つたといふよりも、むしろ自分の住む惨めな東洋を一度知つてみたいと思ふ子供っぽい気持ちから筆をとつた。しかし、知識のある人々の中で、この五三十事件といふ重要な事件に興味を持つてゐる人々が少いばかりか、知つてゐる人々も殆どないのを知ると、一度はこの事件の性質は知つておいて貰はねばならぬと、つい忘



れてゐた青年時代の熱情さへでて来るのである。

すべての資料をコラージュ化し、多面的に捕らえようとした横光の『上海』と、上海の闇の部分「魔窟」に見せられ、上海の暗部を一面的に、「上海とはこういうところだ」と言わんばかりに上海そのもののように描いて見せた井東の『上海夜話』。何れの作品とも、横光の言うように自分の住む惨めな東洋の表象だったに違いない。

井東憲と横光利一、二人の描く上海はそれぞれの立場を超え、相互に補完しながら、「上海」という場の様々な表情を提示しているのではないだろうか。

付記 本稿は文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「上海に関する表象文化研究」(課題番号20620184)の研究成果の一部である。

なお、横光利一、井東憲の作品の引用について、仮名遣いはそのままとしたが、旧漢字は新漢字に改めた。

# (註)

(1) 一九二六年十月 上海日報社出版部発行

(2) 改稿された単行本『上海』では最初から「オルガ」という名前を与えられている。これは改稿によって固有名性を与えられていくほかの外国人と同様であり、横光は改稿によって人物に固有名性をあたえようとしていると考えられる。

(3) 「身体性の表現と小説の政治学―横光利一『上海』における外人表象―」(一九九七年「文学研究論集一四」)

(4) 「身体性の表現と小説の政治学―横光利一『上海』における外人表象―」(一九九七年「文学研究論集一四」)

(5) 一九三七年十月『ホームライフ』

(6) 典拠との関わりについては次の論考がある。

石田仁志・田口律男『『上海』の典拠―『邦人紡績罷業事件と五三十事件及各地の動揺 第一輯』(二〇一〇年『横光利一研究』第八号)

掛野剛史『横光利一『上海』の典拠―雑誌『国際パンフレット通信』・長野朗『華僑』―』(二〇一一年『横光利一研究』第九号)

(7) 大橋毅彦『井東憲〈朦朧都市〉上海と〈情報都市〉上海のあい』(『言語都市・上海』一九九九年 藤原書店)

(8) 「静安寺の碑文」(一九三七年十月『改造』)